

2013 年度 前期

## 授業改善アンケート調査結果

大阪大学人間科学部・大学院人間科学研究科

# 授業改善アンケート調査結果

## 1. 授業改善アンケートの概要

人間科学研究科では、平成 16 年度より、毎学期末に授業に関して受講生に尋ねるアンケート調査を実施している。平成 22 年度後期より実施方式を大幅に改訂し、全科目を対象に授業内でアンケート用紙を配布・回収する方式から、講義科目のみを対象に、学務情報システム KOAN を利用して Web 上で回答する方式に変更した。質問項目も刷新し、また英文を併記して留学生も回答しやすいようにした。実施期間は以下の通りである。

2013 年度前期アンケート回答期間：平成 25 年 7 月 16 日～8 月 5 日

2013 年度前期アンケート回答期間（集中講義 A）：平成 25 年 8 月 9 日～8 月 11 日

（集中講義 B・C）：平成 25 年 9 月 20 日～10 月 18 日

対象科目数・回答数と科目群ごとの内訳は、以下の通りである。受講登録者数に対する回収率は 23.4%である（なお、受講登録者数は受講者数の実態が反映されたものではない）。

平成 25 年度前期授業改善アンケート対象科目数・回答数

学部			大学院		
	対象科目数	回答数		対象科目数	回答数
基礎科目	8	256	共通科目	5	18
共通科目	5	15	先端人間科学科目	3	6
行動系科目	11	87	行動学系科目	9	27
社会系科目	15	78	社会学系科目	9	30
教育系科目	12	148	人間学系科目	8	20
グローバル系科目	11	33	教育学系科目	10	47
			グローバル人間学系科目	13	44
学部計	62	617	大学院計	57	192
計(大学院+学部)				119	809

回収率：23.4%

回収結果は数値化して集計し、自由記述分も含めて教員にフィードバックされ、個別の授業の改善に役立てられている。さらに、平成 22 年度後期より、アンケート結果がより授業に反映されるよう、担当講師からアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの提出を求めている。

## 2. 授業改善アンケートの結果

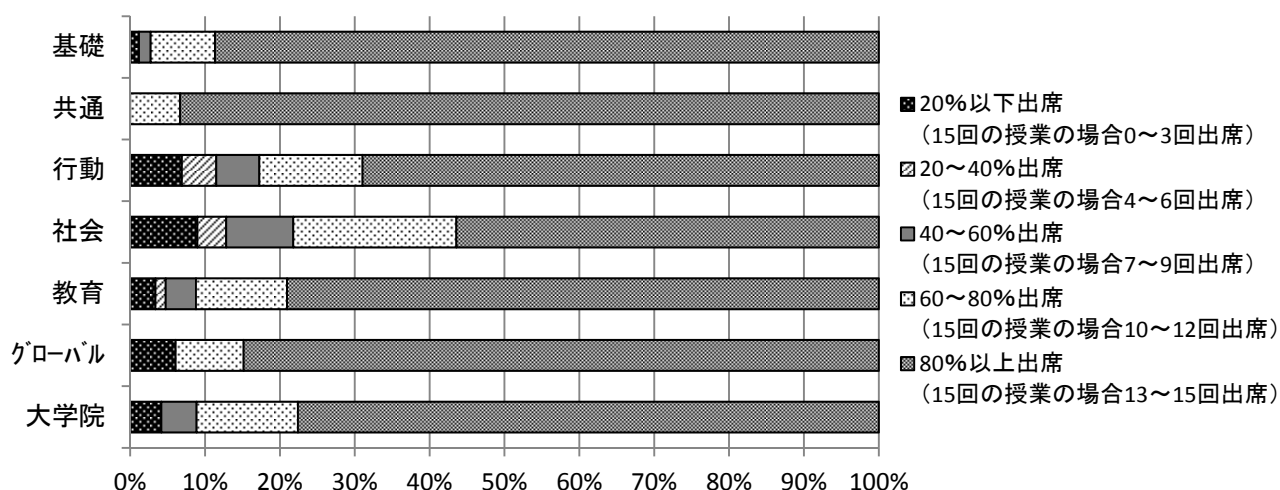
ここでは、平成 25 年度前期の授業改善アンケートの結果を示す。ただし、自由回答項目については除かれ、選択式の設定問についてまとめている。

集計は、学部科目については各科目が属するカテゴリーごとに集計を行った。「基礎」は豊中キャンパスで開講される「人間科学概論」等の基礎科目、「共通」は人間科学部での共通科目である。大学院科目については、回答数が少ない学系があるため一括して集計を行った。なお、各学系によって 1 科目あたりの受講者数などの状況が異なるため、科目群間でアンケート結果を単純に比較できない点に留意する必要がある。また、回答率が平成 22 年の KOAN 導入以降次第に減少してきており、平成 25 年度前期の授業改善アンケートでは回答率は 3 割を下回った。現状では一部の学生の声のみが反映されている状態にあるため、評価委員会でも回答率向上のための取り組み、方法の見直しなどを検討をしていく予定である。

これまでに教務委員会が中心となり、授業開始時点での指導やシラバスの改変などを行ってきた。昨年度比では、「シラバスを読んでいない」という回答した学生が減っており、そのような成果が挙がっているとも考えられる。予習時間については、人間科学部の専門科目の受講が増える IV セメスター、V セメスターごろからは実験実習、演習などが増えることから、それらの科目では予習・復習が必要とされるものの、本アンケートの対象からは演習・実験実習科目は除かれていることから、それ以外の講義科目に割かれた時間として理解する必要がある。「この授業はあなたの求めていたものにあっていましたか?」「この授業は全体として良い授業だと思いますか?」といった項目については、昨年度の前期の結果からは改善が見られた。授業改善アンケート、教員からのコメント、フィードバックの実施により計画→実行→評価→改善のサイクルを有効に働いた可能性が考えられる。平成 25 年度前期では、授業全体に対する評価を 5 段階で尋ねる設問 13「この授業は全体として良い授業だと思いますか?」の回答の平均値が 4.00 であった (1~5 の範囲で数値が高いほど高評価となる)。前年度前期の平均値 3.79 を若干上回る結果となった。これらは、大半の学生にとっては満足できるものとして評価されたと考えられる。

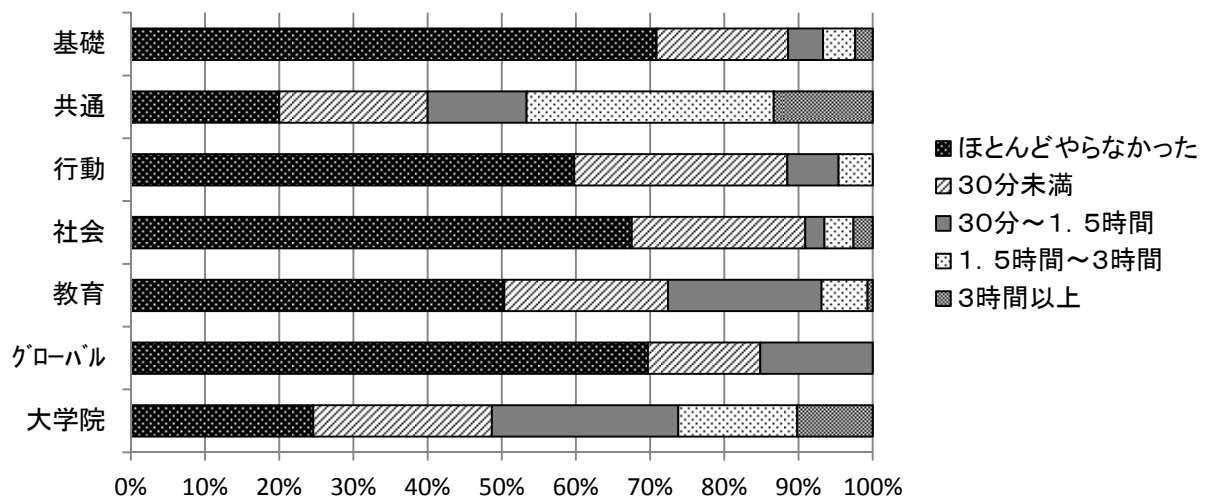
各設問の結果の詳細は以下の通りである。

### 1: この授業へのあなたの出席率はどうでしたか?



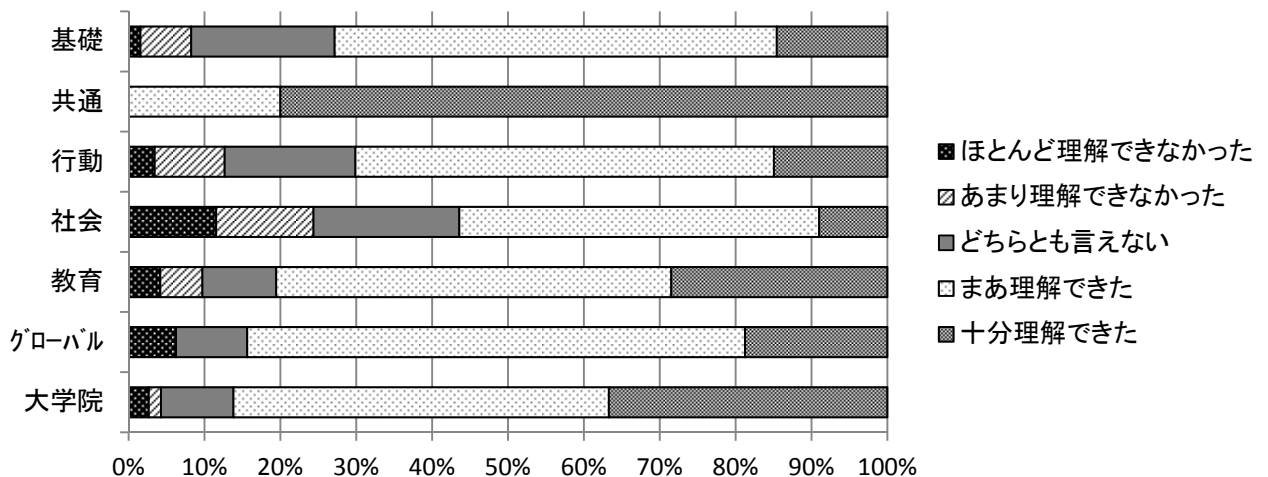
平均値 : 4.61      標準偏差 : 0.92

2：この授業の予習・復習にあてた1週あたりの平均時間はどれぐらいですか？



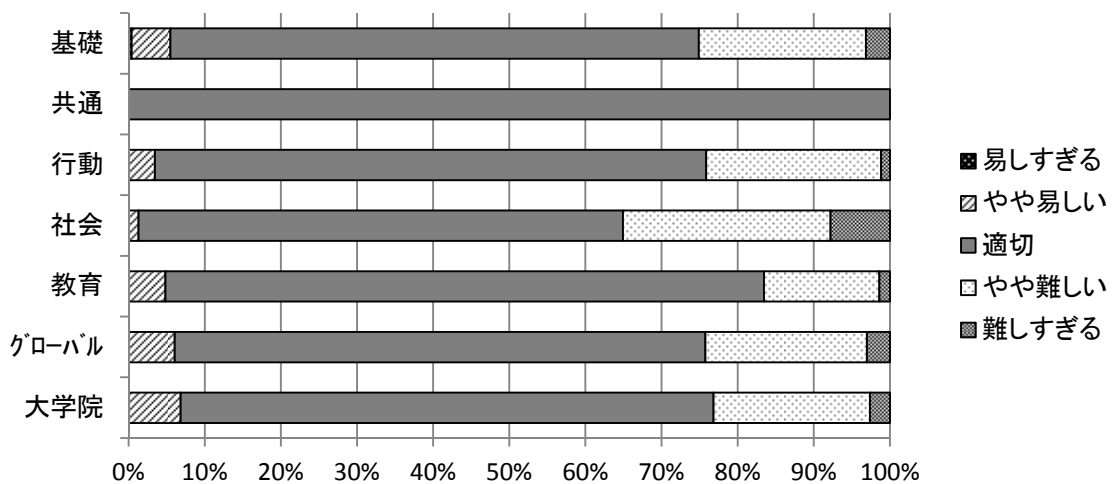
平均値：1.86 標準偏差：1.14

3：授業内容は理解できましたか？



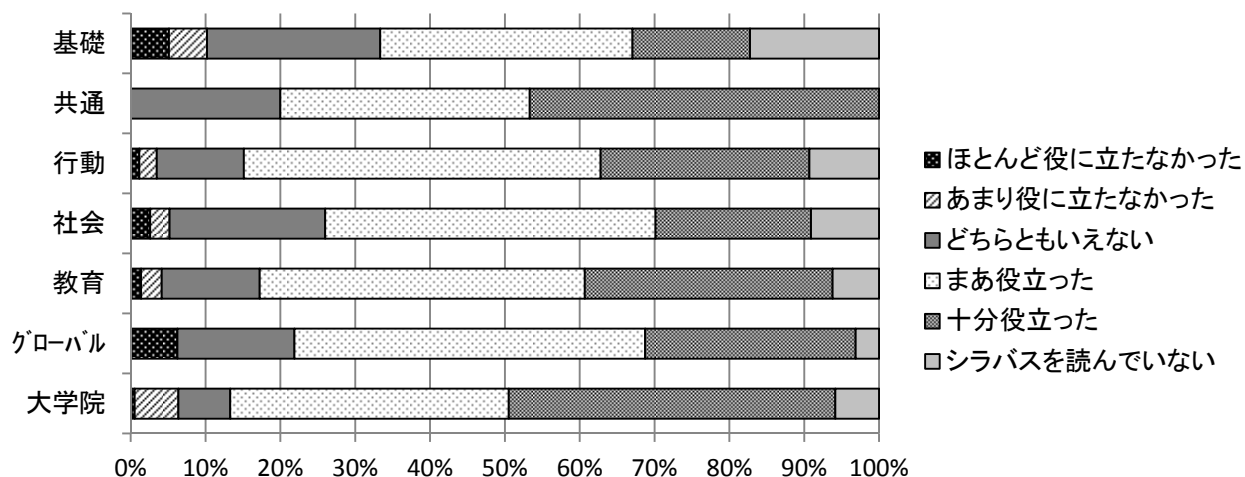
平均値：3.87 標準偏差：0.96

4：授業内容の難易度はどうでしたか？



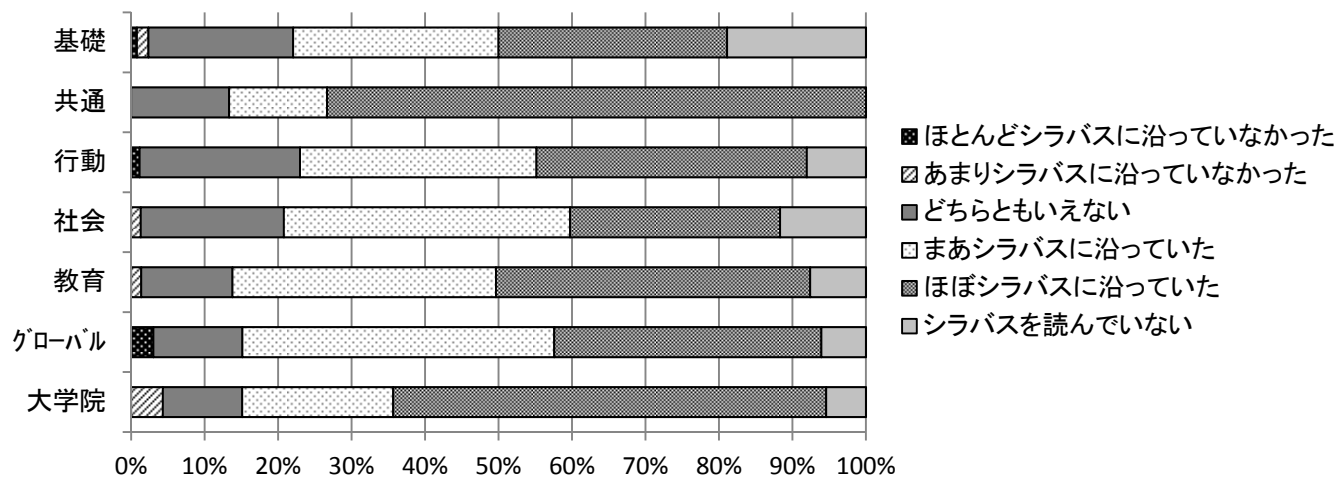
平均値：3.21 標準偏差：0.57

5：シラバスの内容は授業の内容を知るのに役立ちましたか？



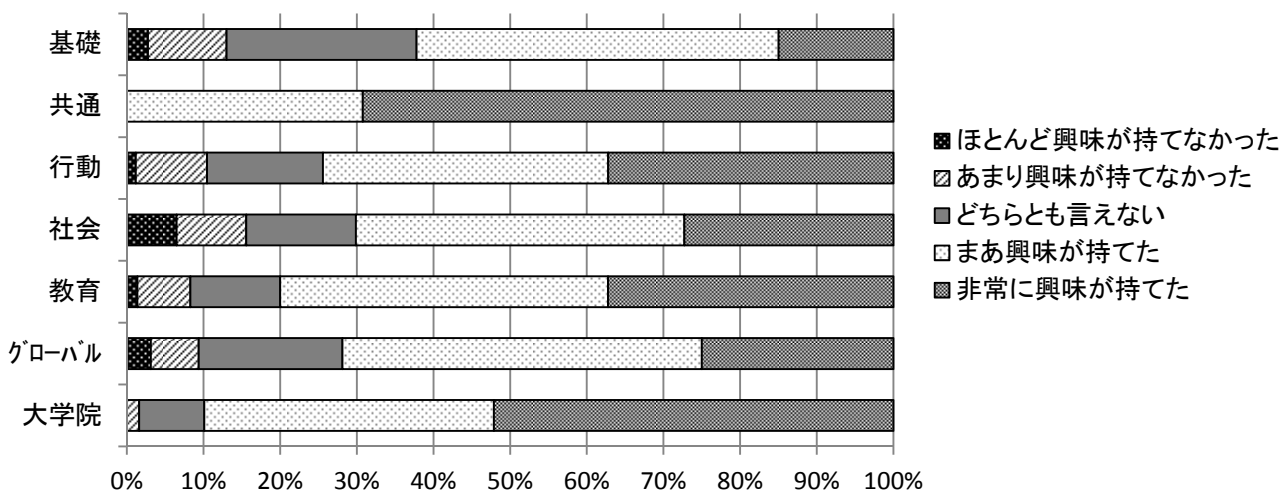
平均値：3.57 標準偏差：1.50

6：授業はシラバスに沿って展開されましたか？



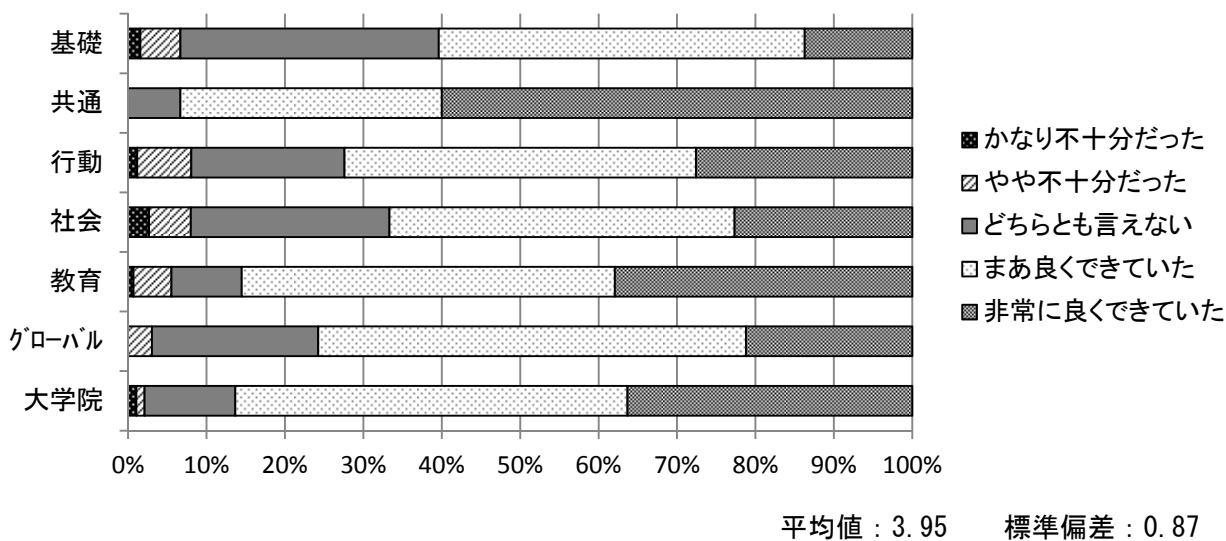
平均値：3.76 標準偏差：1.54

7：授業はあなたにそのトピックに対する関心を引き起こすものでしたか？

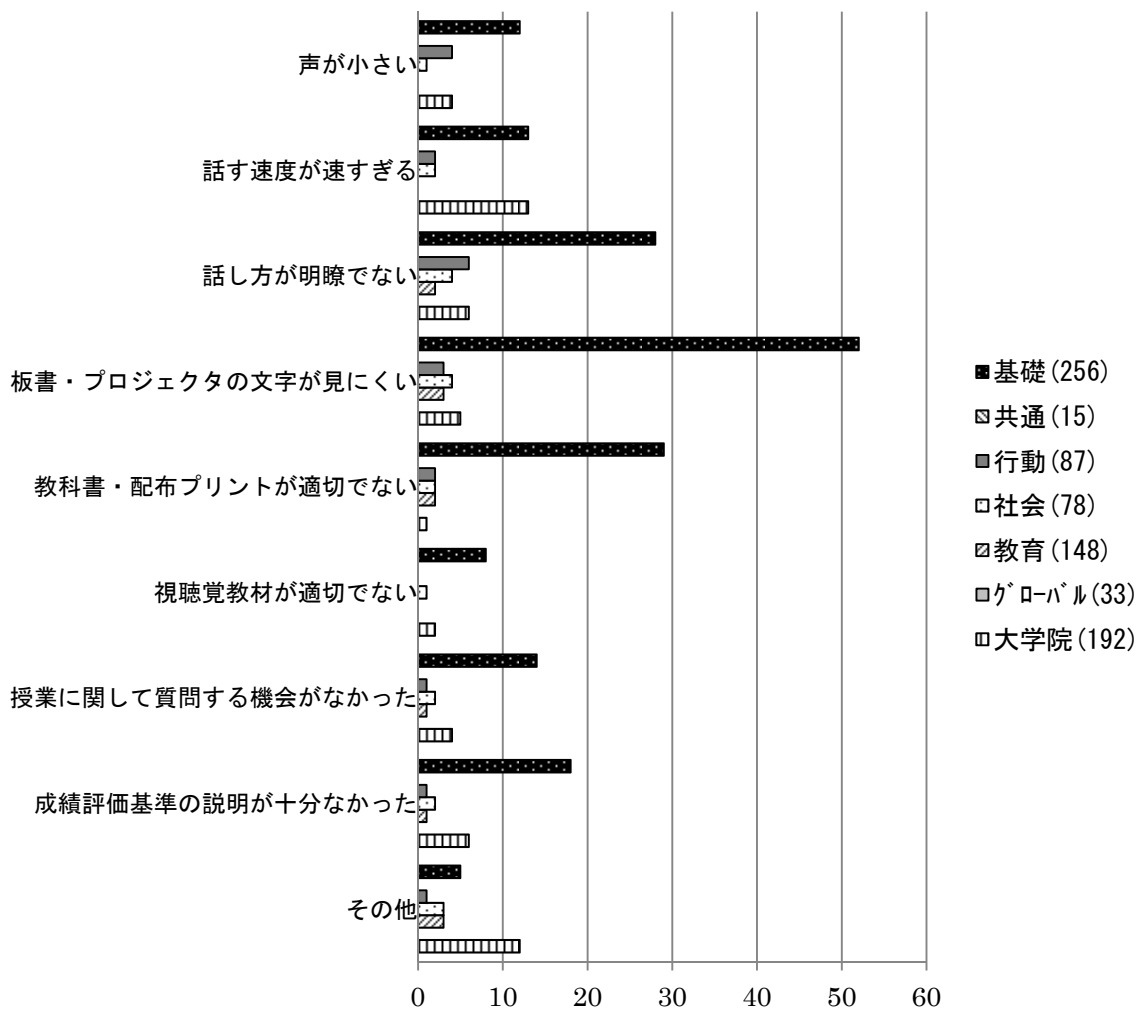


平均値：3.97 標準偏差：0.97

8：授業方法および資料は、十分に工夫・準備されていきましたか？

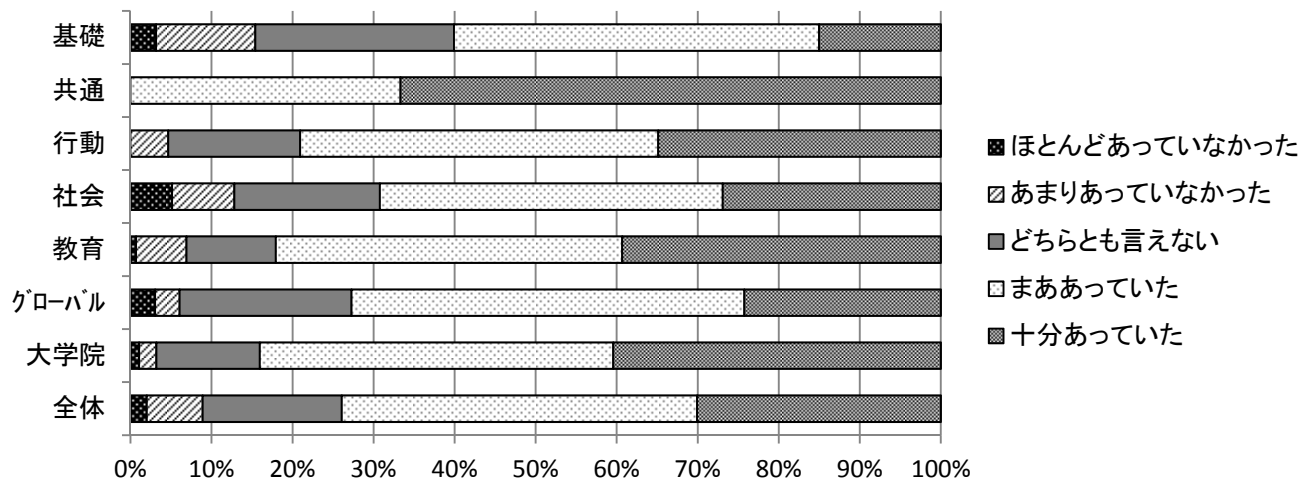


9：授業の進め方について、以下の点で気になったことがあれば、該当する項目にチェックを入れてください。[複数回答可] ※数値は回答数。( )内の数値は各カテゴリーの回答数。



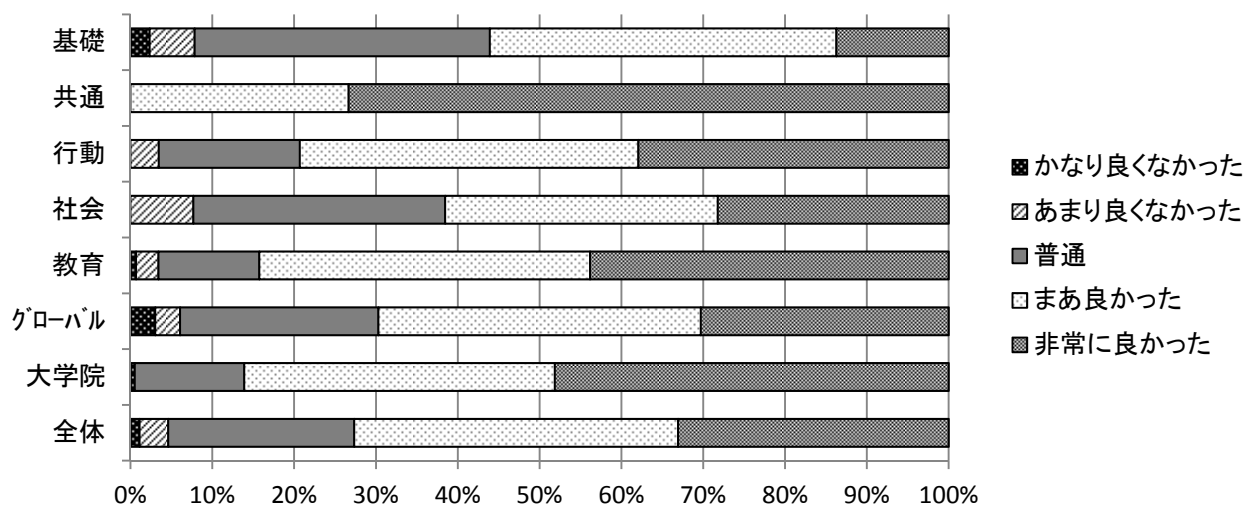
全体の回答数=809

12：この授業はあなたの求めていたものにあっていましたか？



平均値：3.93 標準偏差：0.96

13：この授業は全体として良い授業だと思いますか？



平均値：4.00 標準偏差：0.89

問 13 より学部講義科目に関する満足度の結果を示す（回答者が 10 名以上の科目のみ）。大学院開講科目については回答数が少ないため全て対象から除外した。回答数とは質問 13 に回答した人数を示し、平均値が高いほど受講生の満足度が高いことを意味している。

2013 年度前期に開講された学部のアンケート対象科目 62 科目のうち、回答数が 10 以上の科目は 25 科目で、そのうち平均値が 4 以上の科目は以下の 14 科目であった。

#### 2013 年度前期 学部講義科目 満足度の平均値が 4.0 以上の科目

	回答数	問 13
		平均値
教育制度学	16	4.75
感覚生理学	10	4.70
教育工学 II	15	4.67
臨床心理学 II	13	4.54
比較行動学	10	4.40
高齢者行動論	16	4.38
教育心理学 II	17	4.31
ジェンダー教育学	13	4.31
学校社会学	19	4.16
臨床教育学概論	18	4.11
心理学実験	22	4.09
宗教社会学	11	4.09
文化社会学	13	4.00
情報処理心理学	10	4.00



### 3. 担当教員からのコメント

以下は、授業改善アンケート対象科目（ただし、基礎科目は除く）について、担当教員がアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの一覧である（教員名の五十音順に掲載）。

<b>赤井 誠生</b>
<b>情報処理心理学・基礎心理学特講 I</b>
授業の難易度を含め、内容はほぼ適切であるようでした。発音が不明瞭という指摘が若干あり、今後改善していきたいと考えています。

<b>足立 浩平</b>
<b>心理統計法・行動統計科学特講 II</b>
行動統計科学研究分野の人以外にとっては、統計学は道具と考えられ、その細部がわからないことに、こだわる必要はありません。

<b>石井 正子</b>
<b>紛争復興開発論 I</b>
ディスカッションが役に立ったというコメントをいただきましたので、来年度以降も継続し、さらに充実するように工夫をしたいと思います。
<b>紛争復興開発論特講 I</b>
話し方が早い、明瞭ではないというコメントをいただきましたので、来年度以降は注意をしたいと思います。

<b>井村 修</b>
<b>臨床心理学 II</b>
本講義は、教員による講義が5回、ビデオ学習が1回、学生によるプレゼン8回から構成されている。受講者は心理臨床の事例を事前に読み、プレゼンおよび討論を行うことが求められた。予習が必要な授業であり、受講生の負担は比較的大きかったと思われる。しかしその分身についてのももあつたと推測される。評価は出席、受講態度、レポートによって行われた。シラバスとの対応や評価方法の説明には工夫の必要性を感じた。受講生のプレゼン能力の高さは印象的であった。一方、プレゼン担当でない受講者の質問の仕方は、個人差が大きく、非常に的確な質問をする者と、そうでない者のばらつきが大きかったようである。予習のさせ方に今一段の工夫が必要であろう。今期からTAを使ったが、受講者の評価も良好であった。
<b>障害児(者)心理学特講 I</b>
本授業は公開講座「障害児者のこころと体をはぐくむ臨床動作法」との合併授業であり、地域の障害児者とその保護者、支援学校教諭、臨床心理士、大学院生やボランティアから構成されている。「障害児(者)心理学特講 I」の受講者（大学院生）は、障害児者に臨床動作法を適用し、事例のアセスメント、介入技法、理論的検討をスーパーバイザーの指導の下に体験的に学習した。かなり時間的、労力的に負担の大きい科目であったが、受講者は積極的に参加していた。肢体不

自由、自閉症、知的問題を有する障害児者の行動や心理に関する理解が深まったものと考えられる。またノンバーバルなコミュニケーションの意義や重要性の学習に寄与したと思われる。

**菅阪 満里子**

**認知脳科学論**

この授業は本年度で終わります。分かりにくいところもあったかもしれませんが、少しでも他分野の研究内容を知ることによって役に立てればと思います。異なる専門分野の人たちが、将来、学問領域を超えた共同研究に発展できることを目指しております。そういう意味でも役に立てばと期待しております。

**小野田 正利**

**教育制度学**

隔年開講の科目で、教育裁判例を扱って、学生参加型の「模擬裁判」形式でおこなう授業であるが、実際の授業展開でも、また今回のアンケート結果からも、受講生はよく事前学習をしておいてくれていると思った。今年は、扱う裁判例の種類に偏りがないように、また新しく加えた判例が5つほどあったが、いずれも現代社会を象徴する教育動向、あるいは教育人権に関わるものであり、手応えもよかったと思う。事実、その結果がアンケートの高評価に現れていると思う。授業の最初に、全体を通しての流れや予定を示すプレゼン資料を配付して説明すること、1週間前ではなく、2週間前に課題資料を準備する方法もよかったのではないかと考えている。ただ出席状況は、後半（6月以降）になるといくぶん低下してきたことが残念であった。

**川端 亮**

**宗教社会学・宗教社会学特講**

アンケートへの回答者が3割程度とまだまだ少ないので、改善をしていきたい。今回は、ゆっくりと話すように努力したが、その分時間が足りず、毎回、質問の時間を設けることができなかった。また、試験の結果をみると、理解が十分ではない人も見られた。今後は、質疑も取り入れて、受講生の理解を確かめながら授業を進めていくように改善したい。

**吉川 徹**

**社会データ科学・社会データ科学特講**

あまり充実した授業とはいええないものだったのですが、高い評価をいただいて、大変ありがたいと思っています。

**木村 涼子**

**ジェンダー教育学・ジェンダー教育学特講**

受講生のみなさんの関心をくみ上げつつ、できるだけ双方向の授業になるように工夫をしながら、授業をすすめました。受講生の発表時間を設けることによって、受講生相互の学習機会も確保できたと思います。そういう点は比較的高く評価してもらえたと思う反面、当初のシラバスの予定

を修正・変更することが多かったため、シラバスにあまり沿っていない、時間が足りないという課題も指摘していただきました。次年度はそれらの課題にいかに対応するかを考えて、授業計画を立てたいと思います。

**熊倉 博雄**

**行動形態学**

講義冒頭でも触れましたが、現在の人科カリキュラムにおいては生物系科目が絶望的に少ないため、本科目は盛りだくさんな内容を取り扱わざるを得ないです。そのため、講義の進行も、話す速度も速くなりがちです（元来が早口であるというのも確かですが）。それにもかかわらず、学生諸君がよくついてきてくれたことはありがたいことだと思っています。

**生物人類学特講Ⅰ**

少人数での大学院科目ということで、受講生諸君の同意を得た上でシラバスを逸脱した実習形式の内容としました。熱心に取り組んでもらってよかったです。

**佐藤 眞一**

**高齢者行動論**

学生の評価はおおむね良好であった。しかし、予習をする学生が少なく、課題の提出が課題であろう。学生との相互的やりとりが少なかったため、今後は工夫をしていきたい。

**臨床死生学・老年行動学特講Ⅰ**

参加した大学院生の評価は良好であった。しかし、予習をする学生が少なく、課題の提出が課題であろう。授業の内容よりも進め方を気にする学生がいるので、工夫が必要かと感じた。

**鈴木 広和**

**動態地域論Ⅰ・動態地域論特講Ⅰ**

授業中に学生のみなさんの考えを聞いたり、討論する時間を、もう少し増やしたいと思います。とりあげる話題を増やす、あるいは変えることを検討します。

**高田 一宏**

**コミュニティ教育学特講**

担当者が所属する「教育文化学分野」以外の学生も受講していたが、そうした受講生に対しては、もっと丁寧に解説・説明すべきだったと思う。

**千葉 泉**

**多文化共生社会論Ⅱ**

シラバスが授業の内容をより具体的に反映するように、来年度に向けて努力したい。

**多文化共生社会論特講Ⅱ**

授業が受講生の興味をより喚起するよう、来年度に向けて努力したい。また、もっとゆっくり話すように心がけたい。

<b>中澤 涉</b>
<b>教育社会学・教育社会学特講</b>
やや内容が難しすぎたようだ。内容を詰め込み過ぎている感があるので、もう少し精選したほうがいいかもしれない。受講生はあまり普段、授業に関連して勉強している形跡が感じられないので、授業内容を精選したうえで、プラスアルファを課題として、普段の授業で提出させるなどしたほうがいいかもしれない。講義室のレイアウトが不自然（本館 33）で、確かに学生はスライドを見にくいだろう。これは教員としては如何ともしがたい。教員としてもやりにくい。

<b>中村 安秀</b>
<b>医療通訳論 I</b>
おおむね、満足していただきありがとうございました。シラバスに日程が記載されておらず、人間科学研究科以外の学生のための周知ができていなかったため、この講義を受講したいのに、できなかった学生がいたという指摘は、真摯に受け止めたと思います。今後は、本講義科目のように、他研究科の院生や学生の受講が多い場合には、日程などを大学全体に周知できるように格段の配慮を行っていきます。
<b>医療通訳論 II</b>
アンケート結果を見る限り、おおむね満足していただきありがとうございました。
<b>国際協力学 I ・国際協力学特講 I</b>
学部は 8 名、院生は 10 名の方から回答をいただいた。受講生全体の人数からすると、25%程度の回答率ではないかと考えられる。多数の方から満足という回答をいただいた。貴重なコメントをいただいた。病院視察を希望されているコメントがあったが、数十人規模での病院見学は実施上の制約が大きく、実現可能性は低いと考えられます。受講生の人数が少ない「医療通訳とコミュニケーション」では、病院見学を実施する予定である。また、医療通訳に関する講義ではなく、「国際協力」の話の聞きたいという希望が書かれていた。まさに、2014 年度からは、本講義科目は、英語による国際協力の講義に衣替えする予定である。
<b>国際健康開発論特講</b>
おおむね満足していただきありがとうございました。
<b>人間開発学特講</b>
おおむね満足していただきありがとうございました。オムニバス方式にもかかわらず、全体的に高い評価をいただき、安心しています。「授業中に質問する機会がなかった」という 1 名からの回答について、調査いたしました。しかし、多くの教官は質問する時間を設けていたとのことでした。具体的な状況を提示していただければ、今後の改善につなげていきたいと思えます。

<b>中山 康雄</b>
<b>人間科学基礎理論</b>
授業の難易度に関して、難しいと感じている学生の数が思ったよりも多かった。授業の最後に質問やコメントを書かせるなどの方法を試み、その疑問に次の授業で答えるなどのことをすべきかもしれない。

<b>人間科学基礎理論特講</b>
大学院の講義に関しては、専門分野でとっている学生がいたので、難易度は高くないと感じられていた。積極的に授業に参加してもらう方法を考えるべきかもしれない。
<b>西森 年寿</b>
<b>人間科学概論Ⅲ</b>
全体的には平均程度の評価をもらえたと理解しています。各研究室の研究内容を紹介するという主旨から、また、リレー講義という形式上、どうしても拡散的な内容となってしまう、その点で不満を持たれるのであろうと理解していますが、初回のイントロダクションの工夫（学習方法の説明も含めて）などで、より配慮をしたいと考えます。ご意見ありがとうございます。また、マイクについては教員の対応できる範囲で注意したいと思います。
<b>教育工学Ⅱ・コミュニケーションメディア特講Ⅱ</b>
回答いただけた範囲では、概ね満足していただけたようです。来年度は、難易度をもう少しあげて、深みをだし、そして、それが予習・復習を促せるように構成することが課題であると考えています。また、一件、「話す速度が速すぎる」という声がありました。たしかに焦ってそうなる箇所があったようにも思います。気をつけたいと思います。
<b>Robert Scott North</b>
<b>比較社会学</b>
何回か「解答するよう」と学生に進めていったが、結局解答者は2人だけとなって、このアンケートのやり方を考え直す必要があるのが明確です。KOANの評判があまり良くないし、使えば使うほど嫌いになる傾向が強いようですから、KOANと関係ない方法（紙媒体?!）low-techに戻った方が良くはないでしょうか。
<b>人間科学概論Ⅱ</b>
学生のコメントを読んだが、オムニバス形式の授業なので、自分個人は、どのように受け止めれば良いのか分かりにくいです。
<b>比較社会学特講</b>
パワポを使用する要求は理解しています。来年度はもうちょっとビジュアルな授業に試みたいと思いますが、講義内容を解釈し、make sense of what the professor is sayingは、伝統的な学生の仕事です。パワポにすると、容易に授業内容を変更することができなくなります。明瞭性と弾力性のバランスをとりたいと思います。授業参加、アンケートの解答ありがとうございました。
<b>社会問題の映画の読み方(基礎ゼミ6)</b>
受講者14名の内4名しか答えていないのが残念です。とにかく、答えてくれた学生の評価はまあまあ良かったので、来年度も同じような授業をやりたいのです。
<b>野坂 祐子</b>
<b>教育心理学Ⅱ</b>
大半の学生の関心に沿う内容を提供できたと思うが、予習をしていた学生がほとんどいなかったことから、今後は課題を提示するなど学生の自習を習慣づけるような指導を行いたい。

<b>Don Bysouth</b>
<b>Special Topics in Human Sciences I (Bysouth)</b>
The G30 student evaluation survey indicated that 100% of students were very satisfied with the course overall. In addition, 100% of the students thought the course activities, assessments, level of support, communication with professor and the professor's enthusiasm were very good.
<b>Global Citizenship Seminar (Bysouth, Lam, Kim)</b>
The G30 student evaluation survey indicated that 100% of students thought class activities were helpful and that professors were very enthusiastic. Over 90% of students were very satisfied with course overall, and thought that the classes were well organised and the assessment was fair. Over 80% of students were very satisfied with support from professors, that the professors communicated well with students, and that the purpose of each class was clearly explained.
<b>Statistics for Social Research Seminar (Bysouth)</b>
The G30 student evaluation survey indicated that over 90% of students were very satisfied with the course overall. In addition, 100% of students thought the professor communicated very well, demonstrated enthusiasm, and that the classes were well organised. Over 90% of students thought the course expectations were very clear, that assessments were clearly explained, and that each class was clearly explained.

<b>檜垣 立哉</b>
<b>哲学的人間学・哲学的人間学特講</b>
まあまあ興味をもっていてくれてよかったのではないかと思います。話題は具体的なものにしようかと思いましたが、ちょっと分散したかもしれない。また5回分は非常勤の先生にやっていただいたという経緯があり、そのつながりがうまくいったのか定かではないかもしれません。

<b>日野林 俊彦</b>
<b>比較発達心理学・比較発達心理学特講Ⅱ</b>
学部・大学院一緒の講義で、青年期の内容だったため、内容が拡散し、焦点のしぼりづらい進行になったのではないかと反省しています。

<b>福岡 まどか</b>
<b>地域知識論Ⅰ・地域知識論特講</b>
第1セメスターの授業では、技芸のわざとその伝承について、また世界各地の先住民文化の保護について、という大きく2つのテーマについての講義を行いました。講義と映像資料の視聴を通して、これらのテーマについての様々な問題を考えていきました。受講した皆さんの関心も高く、毎回のコメントも大変興味深かったです。コメントの内容を検討して次回の授業に活かしていきたいと考えております。

**地域言語基礎Ⅱ**

この授業の中では、インドネシア語の基礎的な読解力を養うことを目指しました。セメスターを通して、文法事項の学習とともに、辞書を引きながら1ページ程度のやや長めの文章を読んでいくことができるようになったと思います。また検定の問題のレベルとしては、D級程度の問題を解く力を養うことができたと思います。

**地域言語応用Ⅰ**

この授業ではインドネシア語の応用的な読解力を養うことを目的としました。辞書を引きながら、さまざまなテーマに関する報道文などを読みました。検定のレベルとしては、C級程度の問題を解くことができるレベルになったと思います。

**藤川 信夫****教育人間学Ⅱ・教育人間学特講Ⅰ**

講義内容の理解を深めるため、予習については講義の前提としていたのだが、必ずしも実行されていなかったようであり、その点が残念である。

**三好 恵真子****人間環境論Ⅱ・人間環境論特講Ⅱ**

今年は受講生がいつもより少なめだったので、学生さん同士の議論の時間も充実させようと考えました。受講生の皆さんはとても熱心で、私自身も大変勉強になりました。レポートの提出時期が早いとのご意見がありますが、基本的に手渡しでの授受が適切であると思い、授業の最後を締め切り日としました。来年度以降検討したいと思います。

**村上 靖彦****行為と倫理特講**

参加した学生の皆さんの発表の準備が非常に充実していたので、また積極的な発言が見られたので良い授業になりました。

**Saori YASUMOTO****Popular Culture in Japan**

この授業では、ポピュラーカルチャーはどのように私達の日常生活やコミュニケーションのとり方に影響を与えているのか、また日本のポピュラーカルチャーと諸外国のポピュラーカルチャーとの関係性などについて考えました。文化・年齢・人種・性別の異なる学生が受講していたこともあり、様々な視点から課題に取り組める楽しい授業でした。

注：この授業は、英語で行われました。

**Quantitative Research Methods**

この授業では、量的研究調査を行う際の留意点について考えました。少人数での授業だったので、各学生のニーズに合わせた授業を行うことができました。

注：この授業は、英語で行われました。

<b>八十島 安伸</b>
<b>感覚生理学</b>
講義では、時間の配分が予定とは異なってしまい、今後の内容の再吟味の必要性を感じました。この点は反省点です。内容を理解してもらうためにも、さらなる工夫をするべきでした。あと、講義内容を基にして、受講生同士での議論の場を持てるとより理解に繋がるかもしれないと現在では思い返しています。その点も改善点だと思います。講義中での実験に関しては、積極的な参加をしてくれたら良かったと思いますが、その点についてもどうやって参加を促すかという方法論に改善の余地があると思っています。
<b>行動生理学特講 I</b>
少し内容が多すぎたこともあり、話す速度が速かったかも知れません。その点は改善点かと思っています。

<b>山田 一憲</b>
<b>比較行動学・比較行動学特講 I</b>
私が授業で伝えたかったことは、動物がかわいく賢いということだけではなく、動物について深く理解することによって、ヒトが行動し生きる理由を浮かびあがらせることができるという比較行動学の視点です。アンケートには「いろいろな生物と比較しながらヒトについて学ぶことができ面白かった」、「ヒトやその他の生物の在り方についていろいろと考えさせられました」というコメントがあり、その目的が達成できたことを嬉しく思います。

<b>山中 浩司</b>
<b>文化社会学</b>
回答者は、受講者の2割程度で少なかった。昨年より理論の解説を増やしたせいか、徐々に内容が難しいという回答が増えている。英文をそのまま表示したり、こまかいデータを表示したりするために、理解しづらいものになっている可能性があるため、来年度から提示の仕方を改善したいと考える。
<b>文化社会学特講</b>
回答者が1名のため、コメントは困難だが、パワーポイントによるデータの表示や、文の表示方法を改善し、みやすいものに改善することを検討する。